蕚はツルニンジン屬 (*Codonopsis*) の持つ一特徴であらう。

**○ハプテコプラ追記** (前川文夫)

本誌 20: 120 (昭和19) に久内清孝氏がオホケタデを本草時代にハブテコブラとよんだという記事を書かれた。面白い名前なのでその後見つかると書留めておいたが德川時代にはかなり一般にも使われ同時に數種の植物をさすかの樣に見えて來たのでこゝに記して御參考に供する。

カプテコプラ，植物學雜誌 6 p. (371) (1892) に長野菊次郎氏がオホケタデの筑前方言として記す。少くとも明治年間には通用していた名であることがわかる。

ハブテコプラ，カブテコブラ，蘭山の啓蒙 31 にキササゲに宛てゝいる。

ハブテコブラ (紀州若山，雲州)，ハビテコブラ (熊野) ともにゴシュユを指すと同じく啓蒙 28 にある。

habite-kobura. Siebold et Zuccarini, Fl. Japonica: 50 に *Boymia rutaecarpa* (ゴシュユ) の條に和名としてこの語あり。

Cap di Cobra nomine lusitanico. Thunberg が Flora Japonica: 269 (1784) に *Croton acutum* Thunb. を記載し，長崎に栽培，ポルトガルより渡來と記した條下に，その日本名として上記の名と附記とがある。このものは今の何かわからないがどうやら渡來した名の變遷がおぼろげながらわかるように見える。

**○導管內のラセンが糸になつて出て來る二三の例** (前川文夫)

中將姫が機を織つた原料のハスはあまりにも有名だが，短かいものならば二三ある。自然にある時節になるとらせんがほどけて白い糸となるのはモクレン屬の種子である。熟すると例の朱紅色で扁球形の種子が不規則なあまり氣持の良くない恰好の果實からぶら下がるが，この時のらせんの糸は相當に丈夫だし又長いものは 1 cm 以上もつゞく。これは胚柄內から出たものである。葉では柄を折るとよく出るものがある。子供達はこれを知つて居て柄をこまかく折つていくつもぶらさげて遊ぶことがある。ドクダミは可成よくこの糸が出る。タマアジサキでも出て來るのに氣がついた。ミヅキはそれよりもよい例であつて相當長いものがとれるが，これは小倉謙教授から先年日光で教へて頂いて知つた。山崎敬君からは先日サンゴジュの葉で子供の時遊んだと聞いた。捜すと存外例があると思ふ。肉質の柄で曲げるとピチッと折れるものでないと糸がつゞて來ないやうだ。導管內の螺旋狀の肥厚の說明によいし，又こんなに細くて均一の太さの糸は何か特殊の用途でも見附かるかも知れない。

**○本邦產ツチトリモチ屬の最古記錄** (津山 尚)

日本內地フローラにツチトリモチ屬が確立されたのは，明治16年(1883)大久保三郎氏の天城山での未熟品の發見に次いで，其前後に牧野富太郎先生が土佐で完全な標本を採集されてこれを東京大學に送附され，後明治 39 年 (1902) *Balanophora japonica* Makino なる學名が與へられた時に初まるのであるが，一方琉球フローラでは英國 Kew